少女と王子の恋愛事情

雪ん子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
少女と王子の恋愛事情

【Ｎコード】
Ｎ４５３７Ｖ

【作者名】
雪ん子

【あらすじ】
幼い頃に家族を車の事故で亡くし、引き取ってくれた祖父母も車の事故で亡くした少女――鈴原優花は睡眠薬を飲んで自殺を謀る。が、気がつくと、優花は穏やかな森の花畑にいた。夢を見ているのだと思っていたのだったが……。

少女、世界と別離

何もせず、ただ仰向けで畳の上に寝込んで、どれくらいの時間が経ったのだろうか。
視線だけで柱時計を見ると、まだ一時間も経っていない。てっきり三時間は経っただろうと思ったのに拍子抜けだ。

私がこうして何もせずに生きているだけの死人になったのは、一ヶ月前からだ。私を引き取り、育ててくれた祖父母が車に撥ねられて死んだのだ。
祖父母に引き取られるキッカケとなった家族の死も車による事故……車なんてものこの世から消滅してしまえばいいのに。
車に乗る奴らはわかっているのだろうか。アレは凶器なのだ。便利な移動手段かもしれないが、人を殺せる立派な凶器だ。
……まぁ、乗ってる人間次第だという事は、頭では理解しているのだけど。

家族を殺した運転手は居眠り運転、祖父母を殺した運転手は飲酒運転。最悪である。ルールぐらい守りやがれと罵ってやりたい。……実際、恨み言をぶつけたけども。

わかってはいる。
いつまでも閉じこもっている訳にはいかないし、私はまだ学生だ。花の女子高生になったばかりなのだ。バイトをしたり、遺された財産で普通の暮らしをしていかなければならない。

……が、外は嫌だ。
私の大切な者を殺した凶器があちらこちらで走りまわっている。車を見るだけで身体は硬直し、吐き気がする。

学校には行きたい。でも、車に出くわしたらと思うと、外に出られない。

実はというと、学校に行こうかと挑戦をしたばかりなのである。住宅街の狭い道路では車は見かけなかった。なるべく広い道には行かないようにしていたが、……車が前から曲がって来てしまった。車に対する恐怖と拒否反応で、一目散に逃げ帰っとしまったのだ。

……多分、私はもう限界なのだ。

制服のまま畳に寝転がるという姿のまま、私は思った。

……死んでしまうか。

何の感情も浮かばずに、そう思った。

優しかった母、厳しくも頼もしい父、賢かった兄、色々と教えてくれた祖父、大好きな祖母……誰も、誰もいない。

誰もいないのに、一人で生きて何の意味がある。何の価値があるというのだろうか。

皆と同じように車で死のうかと思ったが、先程の事を考えると恐らく私は逃げ出す。

ならば、家族が死んで不眠症になった私に、祖父母が用意してくれた睡眠薬を全て飲んでしまえばいい。

むくりと起き上がり、祖父母の部屋へと向かう。私の記憶が確かなら、多分あると思う。

和箪笥の引き出しを片っ端から開けていく。そして、薬の入った小さな小瓶を見つけた。

……あった。

私は衝動的に瓶の中身を全て口に含み、水無しで飲み干す。喉に詰まりそうになるのも気に止めず、私は小瓶を空にした。

「はは、あはははははっ！」

狂ったように私は笑う。
いや、実際に狂っていたのだ。
横たわり、私の唇は笑みを浮かべる。

漸く、漸く家族の元へ逝ける。
さようなら、さようなら無価値な世界。

徐々に薄れていく視界の中、私は涙を流す。

……ごめんなさい。
私はとても弱い、一人では生きていけない。
私には、生きるという事は耐え難い苦痛となってしまった。

ごめんなさい、ごめんなさい。

誰に謝っているのかさえわからなくなり、私の意識は真っ白に溶けていった……。

はずだった。
不意に意識がハッキリし、私は重い瞼を開けた。
澄み切った青空が私を見下ろしている。
様々な花が私を囲うように咲き誇っていた。一瞬、棺の中にいて、これらの花は私に手向けられたものかと思ったが違うようだ。
空が見えるのはおかしいし、風を感じる。……つまり、外にいるのだ。

寝転んだまま、車が周囲にないかを探る。
……あれ？空気が澄んでいる。どうやら、車の排気ガスがないようだ。

ゆっくりと身体を起こす。私の目に入ったのは木、いや木の集団……森だ。
下を見る。色とりどりの花が可憐な姿で咲いている。

……おかしくはないでしょうか？
私は自宅で自殺――生きているのだから自殺未遂か――をしたのだから、外にいるのはおかしい。というより、ここは何処だ。こんな森が近くにあっただろうか、いやない。
私の自宅は都市に近い場所にあるのだ。少し広い公園とはならわかるが、車の排気ガスに侵されていない場所なんて知らない。

誰かが私をここに移動させた？
それもおかしい。自殺した人間を発見した場合、救急車を呼ぶ。または、病院へと運ぶのが当たり前の事だ。
私の死体を発見させたくなくて、埋葬のつもりで運んだとしても花畑は変だと思うし……さっぱりわからん。

それに、睡眠薬を服用した割りには妙に頭がスッキリしている。
もっと頭がぼんやりとしていたりするものじゃないだろうか？

ああ、そうか。これは夢だ。死の間際の夢、幻なんだ。
バフッと花畑へ身体を倒す。
色々と感覚がハッキリし過ぎている気もするが、これが一番しっくりくる気がする。
だって、ありえないだろう。自宅にいたはずなのに、見知らぬ森の花の中にいるなんて。
でも不思議だ。こんな夢を見るなんて、私の中にこんなメルヘンちっくな部分があったのか。

まぁ、考えていても仕方ない。
瞼を閉じて、終わる時を待とう。

……おかしい。
状況が変わらない。
夢なんだから、死そのものがイメージされて私を襲うんじゃないかと思ったが、そんな事はなかった。

起きて周囲の探索でもした方がいいかと考えている時だった。
ガサッガサッと何が近づいてきているのを察知する。頭を地面につけているからか、徐々に近づいてきているのが明確にわかる。

私の真上に立ち止まったようなので、ゆっくりと目を開けてみた。

太陽の光に反射している金髪、深い森のような翡翠の瞳、えらく整った顔立ちの男性――恐らく、私よりも二つ程年上であろう――が

逆さまに見えた。
目が合ったが、お互いに黙ったまま見つめあう。
……なに、この眩しい生き物はっ！？
余りにも美形過ぎて本当に人間かと疑ってしまう。まるで光の中から出てきたかのように錯覚する程のオーラに、身体が硬直する。
彼はそんな私の様子がおかしかったのが、声を噛み殺すように笑う。
……初対面の相手にその反応はないだろう。
少しだけムッとし、とりあえず身体を起こして立ち上がる。
黒に近い紺色の制服に付いた草や花びらを払う。
そんな私を観察するような視線、なにこの人？
自然と私も探るような視線で彼を見る。
立ち振る舞いにどことなく気品があり、優雅だ。まるで絵に描いたような王子様。
青を基調とし、裾などに細かい装飾が見える……気がする。うん、気のせいだろう。
「……君の名前は？」
突然名前を尋ねられ、身体がビクッとした。
少し低い感じの落ち着いた声。そんな声で、ナンパされてるかのように名前を聞かれて頬が熱くなる。
そんな自分をごまかすように、軽く頭を振った。
「……鈴原優花、です」
元々は橋野だったが、祖父母に引き取られた時に鈴原になった。亡

くなった母がとても花が好きで、私の名前に入れたそうだ。優しく、可憐な花のような女の子になって欲しいという願いは込められている。

……髪は長くして二つのおさげにしてはいるが、髪質は悪く、可憐でも花のようでもない風に成長してしまっているが……私の大きな悩みである。

「くく、私から見て、そう悪くはないと思うぞ。花の中にいる君は、まるで妖精のようだった」

な、ななななな！？

何を恥ずかしい事を堂々と言っているんだろうかっ！？

ま、待て、落ち着け！

今の発言はおかしくないか！？

私は名前を言っただけなのに、なぜ見た目の話になる？

……まるで、私の心を読んだかのようだ。

「ああ、読んだ。いや、聞いたという方が正しいか？」

「は、あ、うえぇ！？」

言葉にならないというのは、こういう感じなのかもしれないと冷静な自分が考える。それ以外の自分は完全に混乱状態で、もう何がなんだかサッパリでいっぱいいっぱいだ。

そんな私の様子――彼の言葉が本当なら内心も――がツボに入ったらしく、笑いを隠さずに声を出して笑い出す。

「こちらとしては偽りを口にしているつもりはないぞ。……ふむ」

な、なんだろうか？
口調が完全に上に立つ人物という感じで萎縮しているんですけども。
まさか、本当に王子様とか？いやいや、王子様とかありえんでしょう。第一、これは私の夢でしょう？現実じゃないでしょう？

「成る程。あんたは自殺しようとしたが死にきれず、こちらへと渡ってしまった訳か。残念だが、これは現実だ。観念したらどうだ？」

「……は？」

今、私の前にいるのはキラキラした美形の人だけのはずだ。
先程までの気品溢れる王子様という感じではなく、普通の……というかチンピラっぽい喋りをしたのは誰だ。

「何言ってるんだ。俺しかいないだろう？あんたと俺しかいないからな。猫被るのを止めにしたんだ。……それに、萎縮されてまともに話が出来ないみたいだしな」

彼はニヤリと、意地悪く笑う。……詐欺だ。

「何言ってんだ。俺は騙してなんかいないぜ？」

「うぅ、私のトキメキを返せ！」

「俺に惚れたか？まぁ、その方が都合がいいけどな」

「誰が惚れるか！……ん？都合がいい？」

私に惚れられた方が都合いいってどういう事？

「ああ、多分あんたが俺の花嫁だからだ」

「ああ、なるほ……うえぇぇぇぇ！？」

どど、どどどういう事ですかいな！？

花嫁！？私が！？

世界に別れを告げ、死んだはずの私が出会ったのは、眩しい程のオーラを持つ美形だった。

私は彼の花嫁らしい……いやいや、ありえなさすぎる。

夢なら覚めて！てか、早く私よ死んで！

少女、王子と計画する

「ここはあんたの居た世界とは別の世界だ。ま、信じられないってのもわかる気はするが、嘘は言ってないぜ？俺はあんたが恐れている《クルマ》なんて知らないからな」

そう、彼は言った。

彼の話を纏めると、ウィクリアという国にある小さな森に私達はいるらしい。

彼にとって、亡くなったお母さんとの思い出の場所らしく、お城から逃げてきたそうだ。

彼は最初の印象通りの王子様のようだ。……見た目は完璧にそうなのだが、中身はチンピラっぽい。

あ、考えてる事がわかっているんだっけ。見た目だけじゃねぇかとは思っているのも筒抜けか。

本当に車がわからないのかは怪しい所ではあるが、こんな嘘をついて彼が得するとも思えないし、とりあえずは信用しておこう。

彼の名前も聞いたのだが、長ったらしかった為、頭から抜け落ちている。外人みたいな感じで耳に馴れてないというのもあるかもしれない。

「あんたの記憶力が無いだけじゃねぇか？」

「だまらっしゃい！シィ……なんたらかんたら！」

「シィルク・フェイ・ウィスト・ウィクリアだ」

……シィでよくね？いいよね！？

「ま、いいけどよ」

了承は得たが、馬鹿にしたような笑いにムカッとくる。物覚えが悪くたっていいだろうが！

「で、さっきの話なんだけど」

「あんたが俺の花嫁じゃないかって話か？」

う、そうなんだけど、さっきと同じようになぜか照れてしまう。

「俺の国では、貴族や王族は信託を受けるんだ。信託で俺は王位を継承し、花の名を持つ黒の娘と婚姻を結ぶってあるんだ」

ああ、だから名前を聞いてきたのか。

……あ、れ？私の名前は優花、優しい花と書いて優花。……花の名前？

「俺にはあんたの名前がどういう文字かは知らない。だけど、意味は《聞こえ》ていた。優しい花って意味なんだろ？」

「く、黒の娘って所は！？」

「あんたの目と髪、見事な黒だろ？」

日本人は黒髪に黒目じゃい！

そりゃあ、中には茶髪に近い人だっているけれども！

彼は呆れたような視線で――というか実際に呆れているようだ――私の制服を見た。

「それ、黒だろ？」

「紺です！黒に近い紺！」

「いやいや黒だろ？」

「こーんーいーろーっ！」

確かに、些細な違いかもしれない。パッと見は黒に見えるのもわかる気がする。

が、それを認める訳にはいかない。認めちゃいけない。

例えこれが夢だとしても！

「だから、夢じゃねぇって。それに暗示みたいになってんぞ」

「うぐ」

く、ここで反応なんかしたら認める事になってしまう。

「そう考えている時点で認めると思うけどな」

「だーっ！さっきから乙女の心を覗きすぎよ！」

「……うわー、自分で乙女とか。うわー」

引かれた、めっちゃ引かれた。

いや、自分でもないかなーっとは思ったけども！

でも、まだ十六だし全然アリな気もするんですけど。

「……十六？ホントに？」

なぜか驚愕した顔で確認してくる。

心を読む相手に虚偽なんて出来る訳がないでしょうに。

「ちょっと、勝手に心を読んどいて嘘もないでしょうよ。もっと上だと思った訳？」

祖父母の影響もあってか、同級生から散々枯れてるとか言われていたけどさ。

「いや、確かに中身は妙に達観……っていうか、頭が堅い部分もあるなとは思っていたけど。てっきり十四ぐらいだと」

……なんだって？

私は童顔じゃなく、一般的、平均的な顔立ちだと思っている。彼から見て私がそう見えて、彼に対して思った年齢も筒抜けであろう事を考えると……まさか。

「ああ、ユウカの考えてる通り俺も十六だ」

同い年、これが同い年？

私と同い年で結婚がどーのとかの話がある訳？

いやいや、そういう事じゃなくて、こちらの人達から見て私が幼く見えるというのは、外人から見た日本人と同じ感覚なのかもしれない。

……なら、私が花嫁とかになるのを避ける事が出来るかもしんない。

年齢的に無理ですぅーっとか言えばなんとかなるんじゃ？

「俺じゃなかったらそれで良かったかもなぁ」

「……あ」

忘れてた。こいつ、心が読めるんだった。無理じゃん、もう詰んでるじゃん。

最後の希望としては、やっぱり私が死んでるって事だ。死人とは結婚出来ないだろう……多分。

「……はぁ」

近くでシィが息を吐く。……溜息？

いつの間にか、離れていた距離が縮まり、シィは私のすぐ前にいた。

そして、私の身体をスッポリと覆うように抱きしめた。

「なっ！？あ、えぇ！？」

パクパクと、ただ金魚のように口を開けたり閉じたりする私を気にする事なく、シィは自分の顎を私の頭に置いた。

「……死のうとしてたかもしんねぇけど。ユウカ、あんたは生きてる。こうして触れるし、あんたは暖かいじゃねぇか」

小さな声が頭上から聞こえる。顔が見えないので、彼がどんな感情で言っているのか正確にはわからない。……だけど、傷ついている気がした。

恐る恐る手を彼の背中に回し、しがみつくように身体をくっつける。

……暖かい。

ふと、祖父母の遺体を目にした事を思い出す。冷たかった。あんなに暖かくて、心地よかった温もりが失われていたお祖父ちゃんとお祖母ちゃんの身体。ちゃんとは覚えてないけど、お母さんやお父さん、お兄ちゃんもあんな感じだったと思う。

……ほんと、私は弱かったんだなぁ。

一人が嫌で、常にあった温もりが失われて、不安定になっていた。車が怖くなかったら、学校の友達と触れ合えて、私は死のうとまでは考えなかったかもしれない。

ギュッと、私よりも一回り大きな身体のシィに抱きつく。力を入れた時、少しだけ彼の身体が震えた気がした。

「……私、馬鹿だったなぁ。温もりを失うのが嫌だった癖に、自分から温もりを手放しちゃうなんてさ」

自嘲気味に私は笑う。

自分の温もりを手放してしまった私に、今更それを求めようなんておこがましいかもしれない。でも、求めずにはいられない。

「……別にいいんじゃねぇの？それこそ生きているからこその欲求だろうし」

本当にいいのだろうか。自分を殺そうとした私がもう一度やり直してみようとしても。

「自分のしたいようにしろよ。俺だって自害しようとした癖に、未だに生きながらえている阿呆なんだぜ」

バッと身体を少しだけ離し、シィの顔を下から覗く。どこか罰が悪そうにして私を見ている彼。……そうか、傷ついているように見えたのは同じだったからか。

「……じゃあ、私も阿呆って訳ね」

本当はどうしてその選択をしようとしたのか聞こうと思った。シィは私の《声》を聞いているのだから、尋ねたら答えてくれる気がするが、聞かない方がいいと思ったのだ。

私達は同じ。だから、私達は出会ったのかもしれない。

……ふと、冷静になって思った。物凄く恥ずかしい事をしているんじゃないかと。

どうやら彼もそう思ったようで、ゆっくりと離れていった。

……会ったばかりなのに抱き合うって、非常に破廉恥な行為だったんじゃないだろうか。

「……あー、悪かった。すまん」

「いや、シィのお陰でちゃんとわかったから……あはは」

自分でもわかる程の乾いた笑いが出る。ふ、不覚だ。

……少し落ちつこう。

私がここにいる事を考えてみる。

私は生きる意思を見失い、自殺を謀ったがなぜか見知らぬ場所で目を覚ました。そこにシィが来て、色々と話を聞いて私自身現実逃避をしていたが、明らかに私の世界とは違う。最初は夢だと思ってはいたが、それは先程のシィの行動により夢ではないという結論にな

った。
あの温もりが現実じゃないとは思えなかった。……思い出して、頬が熱くなる。

とと、とにかく、ここに私がいる理由を考えてみよう。逸れてしまいそうになる思考を戻す。
シィの話では信託とやらがあり、それによるとシィは『王位を継承し、花の名前を持つ黒の娘と婚姻を結ぶ』とあるそうだ。
……ん？王位を継承するのに、一々信託が必要だったりするんだろうか？

「広く解釈できるのが普通だな。俺みたいに細かくハッキリとしているのは珍しいんだ。父上は確か『深き森にて知を知り、類稀なる宝を手にするだろう』だった、と思う？」

私の疑問に気づいたシィが答える。……私の思考を黙って聞いていやがったな。
彼の父親という事は現王様か。王様としての才覚を得るっぽい風に取れるし、王様になって国という宝を得るとも取れる。
……微妙な違いだけれども、結局は同じ結果な解釈をしてしまったけど、人によって見方が違うのが普通というのはわかった。

「結婚の事まで言われているのが異常って訳ね」

「しかも、ハッキリと継承する事まで言われちまってるからな」

面倒臭いといった表情を隠さずに言う。シィは王様になりたいと思っていないようだ。
……結婚の事まで口出されちゃ、嫌になるのもわかる気がする。
あれ？そういや、私が惚れてくれた方が都合がいいとか言ってなか

ったっけ？

「……あー、その方が楽だと思ったんだよ」

シィいわく、女は面倒臭い生き物なので、惚れられて自分の言う通りに動いてくれるなら結婚してもいいかも、という事らしい。

「おま、それ最低じゃんか！？」

思わず声を荒らげる。

「悪かったって」

本当にそう思っているんだろうか。

にしても、おかしな事ばかりだ。死んだ私が別世界にいるのは勿論の事だが、仕組まれたかのように王子であるシィに出会った。シィには信託で私――本当に私とは限らないが――との結婚が告げられているとか、誰かの掌で踊らされているようで気分が悪い。

まるで、私が死を選んだ事や大切な人達の死さえも最初っから決まっているようで……まさか、決められた運命だとかいうんじゃないだろうな。

冗談じゃない。そんなのクソ喰らえだ。

「俺も決められてるなんて虫酸が走る。だから、取引きしないか？」

「……取引き？」

「俺は父上の後を継ぐ気はない。勿論、あんたとの結婚もだ」

結婚を否定されるのは自分に魅力がないと言われてるようで気に食わないが、黙ったまま話を促す。

「実はな、昔程信託を守ってその通りにしようとかは薄れてきているんだ。だから、あんたとは婚約だけしといて結婚はしないでいる事も可能だ」

「つまり、上辺だけって事？」

「おう。恐らくこのままあんたと城に戻れば、継承と結婚の準備に入られてしまう」

えぇ！？そんな直ぐにでもしようとしちゃう訳？

「出来れば早い方がいいんだろうよ。信託に当て嵌まる娘を俺に選ばせようとしたり、俺が王になった時の為に媚びを売ったりしてる奴らがわんさかだからな」

そうか、彼には全てが聞こえている。自分に対しての好意が本心からか、下心があってかも見分けてしまうのだ。

「私を連れていけば、貴方はますます国に縛られてしまうんじゃないの？」

「だろうな」

彼はあっさりと、何の感情もなしに言い放つ。

だが、彼は先程このままだと、と言った。何か策があるのだろう。

「ああ、ある。ユウカは俺から見て十四ぐらいに見える。だから、

俺より年下なんだと偽る訳だ」

「……十四でも結婚話が出たりしない？」

「そうなった場合、ユウカの故郷では結婚する年齢が決まっている
って言い訳する」

ま、それは嘘にはならないかな。実際に法律で何才からって決まっ
てるし。

「そうなのか？じゃあ、都合がいいな」

「実際は、女は十六以上で男は十八以上じゃないと駄目ってだけだ
から、私はオッケーなんだけどね」

とりあえず、私はこちらでは十四という設定になるようだ。
シィの交渉次第で婚約状態のままに出来るか決まるが、まぁ彼を信
じて任せよう。

「で、貴方は私を連れていってどうするつもり？」

先程までの話は、あくまでも私が協力した場合の話だ。私にとって
意味のない事ならば、逃げだせばいい。……ま、それが出来るかは
別だけど。

「俺の目的は城を出る為の準備だ。だけどユウカ、あんたに会って
少し考えが変わった」

「どういう事？」

「あんたを元の世界に戻す。で、俺もそっちに行く」

ドクン、と心臓が鼓動した。
あちらに帰る、帰る方法が見つかるのはとても素晴らしい事だ。やり直せるならやり直したいと思った。
……だけど、怖かった。車が怖い。家族がいない喪失感を感じるのが怖い。他人の同情が怖い。……一人が怖い。

ガシッと肩を掴まれる。
私を掴んでいる彼の顔を見上げた。真剣でいて、私を案じている顔。

「言ったろ？俺もそっちに行くって。少なくとも一人って事はないだろ？」

「……ああ、うん、ごめん」

少しだけ、意識が飛んでた。
帰りたいと思う気持ちと、帰るのが怖いと思う気持ちがある。まだ、私の中で決着がついてない。
直ぐに帰れるという訳じゃないし、方法が見つかるまで決意をしなければならない。

「まだ、どうしたいかはわからないけど……わかった。あちらへ帰る為の方法が見つかるまで、貴方に協力する。共犯者になってあげる」

「ま、あんたがどちらを選んでも俺は向こうに行く。それまでは不自由はさせないさ。もし、こちらの世界で生きる事を決めても大丈夫なようにしてやる」

私と彼はお互いの手を握りあう。情を込めたものではなく、お互いの利害が一致したという証だった。

でも、私はまだ気づいていないのだ。
彼の提案を受け入れた時点で私の運命が決まっていた事を。
いや、或いは私が絶望に駆られ、死を選んだ時からかもしれない。
これから出会う縁が、私と彼を近づけさせる事を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4537v/

少女と王子の恋愛事情

2011年8月6日12時46分発行